中学生の部

特選

# 「命の水」

石巻市立山下中学校３年　後藤　広樹

私が水のありがたさを思い知らされたのは８年前の東日本大震災の時でした。当時６才だった私は、この日の出来事を今でも忘れることはありません。この震災による死者・行方不明者は１８，４３０人。断水世帯は１８０万戸以上という大規模な被害が確認されました。「蛇口をひねれば水が出る」そんな事が当たり前だと思っていた私にとって、水が出ない生活は衝撃的なものでした。それは３月なのに雪がしとしとと降る寒い日でした。幼稚園から家に帰ってきてすぐに凄まじい強さの地震が発生しました。父は漁師で家にいなく、祖母も仕事でいませんでした。母と姉と私の３人で近くの工業高校に避難しました。その時はまさか津波が来るなど考えることもなく、私たち３人は何も持たずに急いで家を飛び出してきました。

避難所について間もなく、津波が追し寄せました。「津波だぁ」と吐きでるように出たこの言葉に、６才の私は恐怖心を抱きました。ライフラインの全てがだめになり、暗い夜を電気もなく過ごすのは、とても怖かったです。この後の３日間、食べる物も飲む物もなく、３人で落ちていた鉛筆とプリントでゲームをして過ごしました。お腹が空いたことも辛かったけれど、何より大変だったのは水が無かった事です。避難所には大勢の人がいました。水が出ないためトイレはとても汚くなり汚物が溜まっていました。そのトイレを掃除してくれる人がいても、汚れた手や体をまともに洗うことさえできない状況でした。みんなのために、自分が汚れることもいとわない人達の体をきれいにすることさえ、水がなければ出来ないのです。私は、心から「水があれば...」と思いました。

３月１５日。私達３人は、自衛隊のボートに乗って津波の被害を受けていない親戚の家にむかいました。家の中に入ると祖母が待ち構え泣きながら私達に抱きついて来ました。テーブルには親戚のおばちゃんが私達のために、おにぎりをたくさん作ってくれていました。そのおにぎりを食べ、水もゴクゴクと飲み干した時、（あぁ食べ物があるのは幸せだ。水があるって幸せだ。）と心の中に染み渡るように感じていました。

翌日からは私も家族のために１０リットルの水を貰って家に運びました。あの時の水の重さ、責任の重さは今でも忘れられません。しかしその水は飲み水としてあっという間に使い切ってしまいます。汗をかいてお風呂に入りたくてもそれどころではありませんでした。貴重な水を少しでも無駄にすることはできなかったからです。震災から月日がたった現在私の住む宮城県の水道の普及率は９９パーセントで、ほとんどの家から水が出ているという事になります。更に調べてみると１日に使う水の量は、一人当たり平均１８６ℓでした。震災の時は１日に１０リットルを家族で分け合っている状況だったのに今ではこんなに使っているのかと驚きました。蛇口をひねれば当たり前のように水が出ている今は、あの時の水の重さや大切さを忘れかけているように思います。しかしあの震災を通して学んだ水の大切さは決して忘れてはならないものです。震災は私達からたくさんのものを奪っていきました。ですが、失うものが多かった分、当たり前の生活は当たり前ではないのだと考えさせられるきっかけにもなったと思います。

日本だけでなく、世界ではどうでしょう？先進国である日本は、毎日安全でキレイな水が蛇口から出てきます。しかし、それは他の国でも同じでしょうか。日本と同じアジア州にあるモンゴルは飲料水は必ず煮沸するか売店に売られている物しか飲めず、ミャンマーやベトナムも同様の状況だそうです。調べてみると意外にも日本のように安全な水が蛇口から出る国は数少なく、たくさんの国で水不足に陥っているようでした。水不足は、日常生活の悪化・工業・農業の生産率降下、生態系破壊、紛争などいくつもの問題を引き起こします。そして、私達の経験した震災時と同じく、水がないと日常生活が不便な悪循環にも陥ってしまいます。

世界の状況を調べてみると日本ほどいつでもキレイで安心して使える水を持つ国はないといっても過言ではないと思います。この恵まれた環境を当たり前の事と捉えずに、水源となる山を守り、私達１人１人の水への意識を変えていくことで誰もが暮らしやすい社会を継続する事ができるのではないかと思います。

震災から８年が経った今、蛇口からいくらでも水が出ます。しかし、もう一度あの時の事を思い出し、水が出て（当たり前）ではなく、（出なくなったら大変だ）という気持ちで小さな事から節水を心がけ、大切な命の水を使っていきたいと思います。